

ロシアの喫煙文化研究

—塚田富治氏に捧げる—

坂内 徳明

『一橋論叢』第125巻第3号(2001年3月号)に発表された「インテリ国王の「嫌煙」闘争」と題された論考は、著者である故塚田富治氏が終生主張されていた大学内、さらに社会における禁煙の徹底化を歴史的かつ論理的に検証したいという明確な意図にもとづいて書かれたものである。氏は論文の冒頭で、歴史研究には著者自身のアクチュアルな関心やイデオロギーを入れてはならず、対象設定に慎重であるべき、としながらも、サブタイトルの「17世紀の嫌煙論は21世紀にも有効か」に明らかなように、あえて氏自身の超禁煙の立場をより鮮明にし、従来の主張をより尖鋭化させて、自らを奮い立たせるために書かれたかに見える。その意味では、氏自身の専門である近世イギリス政治思想史の枠から見れば、近世イギリスにおける喫煙と禁煙という題材設定と議論展開は氏の研究上のまさにエピソード的で、余剰的な部分であるかもしれないし、そのことは著者自身も認識していたふしが見られる(「筆者の普段の方法論からは大いに逸脱する」)。あるいは、この論考が文字どおりの白鳥の歌となることを意識されていたのだろうか。

1603年に即位したばかりのイングランド国王ジェームズ1世が匿名で発表した『反タバコ論』(1604年)を、その時代背景としてのタバコへの関心も含めて、ていねいに紹介することをテーマとしたこの論文にたいし、本ノート筆者があえてものを言おうという気持ちを抱いたことにさして深い理由はなく、これもまたエピソード的な動機からである。6年前、私が語学研究室長であった時、総会の場で塚田氏から語研共同研究室の2部屋ならびに会議時は禁煙にすべしとの動議が出され、持ち帰って運営委員会での議論の結果、氏の提起を結果的には却下した経緯があったが(語研総会議事録1996年7月17日、同年10月16日の箇所を参照)、その際、私自身としてはあまり十分な理由説明ができなかった(「タバコは必要悪」「メンバーの良識に期待する」)ことが一つである。もう一つは、近年、ロシア民俗学研究の中で目覚ましい活躍をしている若い民俗学者ボグダーノフ氏の喫煙のフォークロアに関する論文を偶然目にする機会があったことである。喫煙がひとつの社会的行為として、しかも近世以来の長い歴史を持つことを考えれば、これも文化研究、あるいは社会史ならびに広義のフォークロア研究の対象となるのは当然である。喫煙家でも、激しい禁煙家でもないばかりか、これまでタバコそのものについて真面目に考えたことすらない筆者がタバコについて論じる羽目になったのは主にこの二つの契機による。そして、特にこのロシアの民俗学者の仕

事を参照するならば、塚田氏の論考にたいして私なりに若干の疑問も生まれたのである。そうした意味で、本ノートは故塚田富治氏へ捧げられる。

1

1963年生まれの新進気鋭のロシア・フォークロア研究者であるコンスタンチン・アナトリエヴィチ・ボグダーノフによる論文「《タバコを吸う理由》—20世紀における喫煙の社会史にむけて」(2001年)は、ロシアに限定することなく広く近世・近代におけるタバコの文化=社会史を記述しようとした、見開きB5版で注も含めて92ページの論文である。全体に論点が多すぎて荒削りなところはあるが、積極的にアクチュアルな社会現象を取り上げ、あえて古典的なフォークロア研究の枠から出ようとする意欲的な仕事である⁽¹⁾。

まずボグダーノフは、タバコを医学、生理学、心理学上のテーマであるだけでなく、「エクストラソマターチェスキイ(超身体的)」(世界観、イデオロギー的)コンテクストにも関係する文化エレメントであり、特殊なシンボル化の対象として歴史的ならびにクリトロジー的(文化学的)アプローチを要求する「シンボラト」(L. ホワイト)であるとする。15世紀末のコロンブス以降、現代にいたるまで西欧を中心に喫煙が文化として力を持って来たことを医学的な面ではなく、フォークロアの視点から考察することはアクチュアルなテーマとして意味を持つとする。

西欧社会での喫煙文化の特徴は、一言で言えば、治療手段としてのみ受け入れられたことであり、原産地である南米やアジアに見られた喫煙をめぐるさまざまな習慣や儀礼との関わりが完全に捨象されたことだ、とボグダーノフは述べる。西欧での流布はポルトガル(ニコチンの語源となったジャン・ニコはポルトガル駐在のフランス人で、タバコが頭痛治療に効果あることを西欧に広めた人物)から始まり、1570-80年代には医学手段として定着し、その状態は17世紀半ばまで続いた(17世紀前半のヨーロッパの諸都市におけるベスト蔓延にたいする予防手段として、また貴族のたしなみや流行品のみならず義務として)。そして、西欧社会では無視されることが多かったタバコの文化史的コンテクストをボグダーノフは拾い上げるべく、パイプがfair pipes, celtic pipesと呼ばれていたことからその呪術性を指摘し、タバコとパイプが護符であったことに注意を喚起する。さらに、喫煙の心理学から未成年の喫煙への志向に及び、後者の中に大人への通過儀礼としての側面を見る。はじめての喫煙が予期した生理的満足を与えないどころか、むしろ逆に苦痛をとまなうことに通過儀礼としての意味を認めるのである。

喫煙は年齢的ボーダーのみならず、通過すべき社会的ステータスの獲得を表現するテキストであるとして、ボグダーノフがあげるのは主にロシアを中心としたさまざまな事例である。それは慣用語や言い回し、諺にはじまり、現代のタバコを飲みながら友達を惚れさせるべく唱える呪文⁽²⁾、現代のアニメ、子供の歌などの口承文学、夭折したロック歌手ヴィクトル・ツォイの歌詞にまでわたる。そうした多くの事例からかれが導き出すのは、犯罪やフーリガンなどの反社会的行動に見られる(ボグダーノフは「反行動」というタームも使う)喫煙の

イメージにもかかわらず、問題はネガティブな結果それ自体にはないという結論である。例えば、「ことはタバコ」というロシア語《Дело—табак》の言い回し⁽³⁾は「おだぶつ」とか「とても悪い」という意味だが、肯定、否定のいかんを問わず終末を迎えたことが重要であり、多くの意味と価値を持つが些細なことというのがこの言い回しの核心である。その意味でタバコの社会的セマンチカは「敵対物から逃れる方法」、障害の回避にある、という。

喫煙者のイメージとしてもっとも相応しいのは黙ってタバコを吸う人物である、というボグダーノフの言い方には、すでに『沈黙の人類学概論』(1998年)の著者としての自信と、そしておそらくはかれ自身が(ヘビー?)スモーカーとして仕事をしてきた思いとがうかがえる。喫煙が連想させる「無言」のセマンチカは広く認められるものであり、タバコの広範な「テーマ的」エクспリケーションとして、愛・友情・死・運命を示唆するという。ここで例示されるのは1940年代の映画の場面、チャストーシカと呼ばれる即興的な短いロシアの歌謡、現代詩人の作品、さらにはボリス・パステルナークの詩、これもソビエト時代に爆発的な人気を博したロック歌手ヴラデーミル・ヴィソツキイの歌などである。喫煙は沈黙をもたらすだけではない。外界の「騒音」と対立する自己の内面的世界を作り上げ、世界との「私的で」リアルなコンタクトをもたらし、生者を死者とも結び付ける。その意味でタバコは人間の空間的、時間的ボーダーを広げることによりコミュニケーション上での自己再現の可能性を補完する。ここまでタバコの世界を広げてくると、その先に見えるのは「実存主義的な共存と身体上の共感の意味論を定着させ、喫煙を、感覚論とメタフィジカとが奇妙に交錯する哲学思索のテーマへと展開していく」方向である。ボグダーノフのまなざしはそこまで見据えようとして、文学、フォークロア、現代のコマーシャル、そして映画などから事例を引きながら、喫煙における自己と他者の相互浸透、超越性と他者性(複数)までも指摘するのである。時に読者は難解な論旨展開にとまどうこともあるが、にもかかわらずフォークロアを含めた多数のテキストによって展開されたタバコの形而上学には多くの興味深い示唆があることを認めざるをえない。

抽象度の高い議論の方向をボグダーノフは急展開させて、ロシア史におけるタバコの流布を述べる。まず指摘されるのは、ロシアと西欧とのタバコ受容の違いである。結論から言えば、西欧で広まっていたタバコの医学的な議論を16-17世紀のロシアはまったく経験せず、タバコにたいするオフィシャルな態度は経済的ないし医学的でなく、いきなり政治的で宗教的な状況により形成されたという。ロシアのタバコは16世紀末に浸透し、イワン雷帝時代に独占権を持っていたイギリス人の手でより広まり⁽⁴⁾、人々の支持を得るが、権力と教会の反感を買うようになり、17世紀前半には禁止対象となった(1634年の総主教によるタバコ批判、ミハイル・フォードロヴィチ帝による禁止令、さらに1649年法典による厳罰など)⁽⁵⁾。タバコが禁止された理由としては、火事の原因、アルコールとのアナロジー、魔術的な民間薬を思わせる麻酔作用、などが考えられるが、特に大きな要素は、国外から持ち込まれ、まず外国人が使用した新奇な品物であった点をボグダーノフは指摘する。16-17世紀のロシアでは外国人はつねに敵視の対象ではないが、危険な存在としてあり、したがって、タバコはイデオロギー的・信仰的・日常的なアスペクトを統合した重要なテーマとなっていた。

その意味で、ピョートルによる改革政策はタバコの流布にとってもっとも重要なファクターとなった(一定の税を払えば売買が許可されることを認めた1697年の法令、ピョートル大使節団イギリス滞在時のタバコの大量買い付け、1705年の国家専売決定など)。それは税制度を支える経済的なものとしてではなく、政治的な意義を持つものとして、「新しき・改革・イデオロギー上の革新の記号」であった。それにたいして正教会はどうか。彼らはそれまでタバコの意義を真剣に認識することなく、「ラテン」起源の理由で非難は十分としていた。ピョートル改革によって反タバコの神学的議論を開始したとはいえ、聖書にタバコに関する証言がないこともあり、教会改革者は複雑で二義的なポジションに置かれ、妥協せざるをえなかった。一部で、タバコ飲みは死刑に価するという内容のギリシヤ語文献の翻訳⁽⁶⁾やロシアの宗教異端である旧教徒による厳格なタバコ拒否はあったとはいえ、ピョートル治世の末までには、ロシアのタバコをめぐる状況はヨーロッパとはまったく異なるものとなっていた。それは簡単に言えば、タバコの受け入れは支配権力体制にたいする忠誠を示す独自の指標であり、喫煙は医学的な評価でなく、アクチュアルなイデオロギー的な評価の対象となっていたとボグダーノフは先の主張をくり返して述べる。

ロシアのタバコに関する口承文学はこうした状況を反映していた。タバコに関する伝説の多くが、一方ではサタンの陰謀とキリスト教徒の誘惑をほぼ同一主題とした旧教徒の物語、他方ではたばこをもたらしたのは東方からやって来た信仰者である、とか、ほかならぬ聖母がもたらした、彼女は頭痛の際の治療に使い広めたという伝説等々、タバコの起源や機能そのものについてけっして一義的でなく、相対立する側面がそのまま共存している。したがって、こうしたフォークロアに見られるタバコの功罪はそのまま現代におけるタバコの害悪に関するテーゼにも継承され、功罪評価は相補う、独自の社会的レトリックとなっている、と記してボグダーノフは論考を終えている。

2

ボグダーノフ論文の全体像を概観する時、魅力的な叙述の反面、いくつかの不満も残る。あまりにも多くの論題と、そしてきわめて多彩な思いつきと切り口にもかかわらず、そのことが逆に見ればいくらか散漫で、説明不十分な記述となっていることは印象として否めない。個別の実証というのではなく、より緻密な議論展開が求められる。せっかくのアイディアをより効果的に活かしていきたいのはもったいない。そして、この考察の理論的な柱ないしサブタイトルがタバコの記号論、あるいはその社会史と銘打たれてはいるが、やはりそのことを検証し直す部分が必要である。

しかし、全体として見ればこの論考には多くの新しき、そして現代のフォークロア研究の今後を占う方向性を認めることができる。それは、一つにはフォークロアという概念の広がりである。ここには、狭義の口承文学のみのフォークロア、あるいは「むかしむかしある所に、」風の「古典的な」フォークロア・ジャンルからの「解放」が明確に意識されている。それは、いわばソビエト民俗学の脱構築的な方向性とも呼べるかもしれない。そのことは、タ

バコ・喫煙という対象そのものの斬新さや目新しさの問題ではなく、むしろポスト・ソビエト的な方法論を示していると考えられる。そして、このことと関連して第二番目に、かれのフォークロア研究が口承文学へ収斂されるのではなく、むしろそれとは逆向きに、人類学や社会学や歴史学、時に精神分析学や文学に向けてオリエンテイトされていることがあげられる。それは、たんに関連分野の寄せ集めとしての学際風な研究や、ペダンチックな外国文献の引用と羅列として構想されたものではないことはこれまで述べてきたことから明らかである。そして、第三番目にあげておきたいのは、ボグダーノフがきわめて伝統的で古典的なフォークロア概念にもとづきながら、それを現代の文化研究の方法論で武装することによってタバコのフォークロアをテーマとしたということである。かれによれば、フォークロアとは民衆の知識の提示であり、問題発見・解決的価値を持つものである（アメリカの民俗学者 S. Bronner の指摘）。その意味で、フォークロアとはつねに対象としての社会的事実＝現象をその発生と起源の場において見据えようとする知識＝学であり、そのことが方法として自覚されていなければならない。喫煙とはフォークロアの知識の結果であり原因である、「喫煙について我々はどこから知識を得たのか、なぜ、いかにタバコを吸うのか（吸わないのか）、にたいして言うべきことは何か」というかれの出発点、そしてタバコのフォークロア的神話化はビョートル時代に顕著となった、という到達点が提示されたのはその意味で理解されるだろう。

以上、現代ロシアのタバコを吸う理由の論拠を紹介してきたが、さて、ボグダーノフ氏の議論にたいして、おそらくは断固躍起となって反駁するであろう塚田氏のあの生真面目さが今となっては思い出されてならない。

註

1. 著者のコンスタンチン・アナトリエヴィチ・ボグダーノフについて簡単にふれておくならば、1963年生まれ、レニングラード大学文学学部（古典文献学講座）を卒業後、ロシア科学アカデミー付属ロシア文学研究所（フォークロア部門）院生を経て1992年に文献学修士、現在は同研究所の同部門の研究員。著書として、ソビエト崩壊後の貨幣・市場経済体制下で民俗学の立場から金銭の文化史を論じたきわめて注目すべき仕事『フォークロアにおける金銭』（1995年）、第二作として『Homo Tacens, 沈黙の人類学概論』（1998年）、そして、ここでとりあげたタバコ論を収録した論文集『日常性と神話』（2001年）が単行本である。この論文集には、理論的著作として「フォークロアの現実。研究のパーспекティヴ」の他、鬼ごっこ、くしゃみ、カニバリズム、ソビエト時代の行列に関する論考が収められている。また、かれはロシア文学研究所による「日常性と神話」をタイトルとするシンポジウム（1998年に開始、現在まで3回おこなわれている）の主催者の一人であり、ここで問題とするタバコ論は、当初、「フォークロアと喫煙。20世紀における喫煙の社会史にむけて」という表題で、その第二回コンフェレンス（1999年2月24-26日、ペテルブルグで開催）で報告され、報告集（1999年）に収録後、大幅に加筆されて上記の論文集に収められたものである。他にボグダーノフの論文として、「病氣とレトリック、19世紀ロシアにおけるコレラ伝播の社会的神話の研究に向けて」

(2000年)など。

2. 1980年代末にモスクワ医学学校の女子学生から記録した呪文として、
ツァーリである煙よ (マッチを吹き消す)
どうか御加護を (一服吸う)
神の僕である [ここに相手の名] を惚れさせてください (一服)
かれが食事をしてても食べ過ぎないませうように (一服)
飲んでも飲み過ぎませうように (一服)
神の僕のもとへ (一服)
雌牛が雄牛のもとへ向かうように (一服)
雌鴨が雄鴨のもとへ向かうように (一服)
私の言葉が石よりも固くなりますように (一服)
アーメン (一服) アーメン (一服) アーメン (一服)
3. この言い回しは、川の船曳き人夫が生み出したものである。『ロシア慣用句辞典。歴史・語源』(ペテルブルグ、1998年)の「タバコ」の項を参照。
4. ロシア革命以前に出版されたもっとも代表的な『ブロックハウス百科事典』の「タバコ」の項目によれば、イワン雷帝の時代にイギリス人によりもたらされた、との通説にもかかわらず、近年の研究によれば、アメリカ発見以前にロシアはタバコを知っていた、タバコは西欧経由ではなく、アジアからもたらされた(日本、中国、インド、ペルシャ、中央・北アジアでは古くから流布していた)とある。
5. 1649年法典の第25章、第11、16項。16-17世紀の喫煙については、コストマーロフ『16-17世紀大ロシア人の家庭生活と習慣の概観』(1860年)を参照。
6. ロヴィンスキイ『ロシア民衆絵画』第4巻(1881年)、266-267ページにミハイル・フョードロヴィチ帝時代にギリシャ語から翻訳された文献として「神との講和」の内容紹介がある。